

蒙古語史における「*iの折れ」の問題点*

栗 林 均

はじめに

1903年に公刊されたラムステッドの「蒙古文語とウルガ方言との比較音声学¹⁾」は、蒙古語の史的・比較研究の基礎を据えた記念碑的な論文として知られる。これは、当時のウルガ²⁾における蒙古語口語の詳細な音声学的記述に加えて、それを蒙古文語の正書法と比較したものであった。

モンゴル民族の書きことばとして用いられてきた蒙古文語の成立は12～13世紀にさかのぼることから、ラムステッドにとって蒙古文語とウルガ方言の関係は、ちょうどラテン語とイタリア語の関係のように、比較言語学でいう親言語^{おや}と娘言語の関係として捉えられていたものと思われる。『比較音声学』のモチーフは、蒙古文語の基礎にあったと推定される12～13世紀の蒙古語口語からウルガ方言への音声的变化の詳細を明らかにすることであった。

ラムステッドの『比較音声学』で指摘された、ウルガ方言の重要な音声変化のひとつに、いわゆる「*iの折れ」と呼ばれている現象がある。すなわち、蒙古文語で第1音節に母音*i*をもつ単語は、ウルガ方言にあっては同じ単語の第1音節に後続音節の母音が「浸透」して、別の母音としてあらわれている。ラムステッドはこれを *Brechung* (折れ、割れ) と呼んで、次のように定式化した³⁾。

*) この小論は、1982年6月5・6両日に上智大学で開催された日本言語学会第84回大会における研究発表の原稿をもとに加筆補正したものである。

1) G. J. Ramstedt, "Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen" *Journal de la Société Finno-ougrienne*, XXI: 2, 1903. 以下『比較音声学』と略す。

2) ウルガは、現在モンゴル人民共和国の首都となっているウランバートル市の旧名。

3) ラムステッド『比較音声学』§55. 表の中で >印の左側は蒙古文語の転写形、右側のイタリック体はウルガ方言の音声表記形。例は一部を省略した。

a の前の i	>	ⁱ ä, a ; 語頭で <i>jä, ja</i> .
miŋan	>	<i>mⁱäŋg_{<v}</i> 'tausend'.
miqan	>	<i>maxxv</i> 'fleisch'.
imagan	>	<i>jamā</i> 'ziege'.
e の前の i	>	ⁱ ë, e ; 語頭で * <i>jë</i> > <i>i</i> .
bider	>	<i>BⁱëDDør</i> 'strieme'.
nigen	>	<i>neg</i> 'eins'.
u の前の i	>	ⁱ u, u. <
cilagun	>	<i>tšⁱulū_{<}p</i> 'stein'.
cisun	>	<i>tsⁱu_{<}s</i> 'blut'.
ü の前の i	>	ⁱ ü, u ; 語頭で <i>jü</i> .
sidün	>	<i>šüD</i> 'zahn'.
jisün	>	<i>jüs</i> 'neun'.
o の前の i	>	o.
cino	>	<i>tšⁱonv</i> 'wolf'.
irogor	>	<i>joröl</i> 'boden'.
ö の前の i	>	ö.
irögel	>	<i>jörⁱnl</i> 'segen'.

ちなみに、'Brechung' は印欧比較言語学のタームを借りたものである。ジーフェルス⁴⁾によれば、特にゲルマン祖語における単一の母音が隣接する子音の影響のもとに二重母音化する現象が Brechung として説明されている。印欧比較言語学に通暁していたラムステッドはウルガ方言における第1音節のわたり音に注目して上の現象に Brechung のタームをあてたものと思われる。

逆にみると、ラムステッドは、上の現象を Brechung とみなすことによって、わたり母音を不必要に強調した面がある。このことから、現在の蒙古語学の慣用では、「折れ」(Brechung, breaking) から「二重母音化」という意味は失われ

4) E. Sievers, *Grundzüge der Phonetik zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen*, 5. Aufl., Leipzig, 1901, § 808.

て、単に母音の「逆行同化」の意味で用いられている。ポッペは、「*iの折れ」を「第1音節の母音 *i の、第2音節の母音による同化⁵⁾」と定義したが、今日では一般にこの定義が受け容れられており、本稿でもこれに従う。

1. ウルガ方言の「折れ」に関するラムステッドの図式は、細部の点では修正を受けながらも、基本的にはほとんどそのまま今日に受け継がれている。たとえば、蒙古文語と口語方言との比較研究においてひとつの頂点を極めた、ウラディーミルツォフの『ハルハ方言と蒙古文語の比較文法⁶⁾』では、「*iの折れ」に15頁のスペースが当てられ、新たに豊富な例を加えて例外の説明が行われているが、基本的な図式はラムステッドのそれを継承したものである⁷⁾。

さらに、「*iの折れ」は、蒙古語史における重要な音声変化のひとつに数えられている。ポッペは、蒙古語史の時代区分に際して、16世紀を目安に、それ以前を Middle Mongolian、それ以降を Modern Mongolian と呼んだが、「*iの折れ」は、二次的な長母音の形成や、語頭 *h* 音の消失等とならんで、Modern Mongolian を特徴づけるメルクマールのひとつとみなされている⁸⁾。この場合にも、現代蒙古語の諸方言に生じたとする「*iの折れ」の図式は、「*eの前の *i」を除いて、ラムステッドの図式にもとづき、それを敷衍したものである⁹⁾。

5) N. Poppe, "On the so-called breaking of *i in Mongolian" *Ural-Altische Jahrbücher*, Bd. 28: 1-2, 1956, p. 43. このように「折れ」を第1音節に限定する見方には問題が残るが、本稿の範囲では上の定義に従って不都合はない。

6) Б. Я. Владимирцов «Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика» Ленинград, 1929. стр. 176-190. 以下、『比較文法』と略す。

なお、「ハルハ」方言は、ウランバートル(=ウルガ)を中心にモンゴル人民共和国に広く行われている方言であり、実質的にはラムステッドの「ウルガ」方言とほとんど同じもの。

7) ラムステッドの図式とウラディーミルツォフの図式の最も大きな違いは、ウラディーミルツォフは蒙古文語の第2音節以降に円唇広母音 *o* と *ö* を認めない立場をとっていることから、「*o*の前の *i*」と「*ö*の前の *i*」が図式からはずされていることである。

8) N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954, p. 2.

N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955. pp. 15-16. 以下 Poppe, *Introduction* と略す。

9) Poppe, *Introduction*, pp. 33-44. 「*eの前の *i」は、ブリアート方言で *e* となるほかは、他の方言では規則的に *i* が保存されている、とされた。

ところで、このように蒙古語音韻史の上で重要な音声変化のひとつとみなされている「**i*の折れ」はまた、例外の多い「不規則な」現象としても知られる。ポップによれば¹⁰⁾、現代蒙古語で、**a*の前の**i*は*a*となり、**u*の前の**i*は*u*となる等の原則にもかかわらず、**a*の前の*i*が常に*a*となっているわけではない。

「多数の例外 (numerous exceptions) があり、**i*はある方言で*a*となりうるのに、別の方言では**i*が通常*a*となるのと同じ条件のもとにあって*i*として残っている¹¹⁾。」

このようなポップの説明を引き合いに出して、ドルファーは、

「蒙古語の言語発展はしばしば特異で、説明困難である¹²⁾。」

とさえ断定した。

しかし、はたして、蒙古語史における「**i*の折れ」は伝統的な比較方法の接近を拒むような性質の現象なのか、再度検討の余地がありそうに思われる。

この小論の目的は、諸方言間の対応の不規則性を検討することからはじめて、現代蒙古語における「**i*の折れ」の図式の適用の妥当性に関する問題点と、ラムステッド以来繰り返されているハルハ方言の「**i*の折れ」の図式自体にひそむ問題点を明らかにすることである。

2. 最初に、「**i*の折れ」に附随している、諸方言間の「不規則な対応」を検討する。ここでは、蒙古文語で母音*a*に先行する*i*が絶対語頭に位置する場合をとりあげて、それに対応する現代蒙古語諸方言の母音のあらわれを調査した結果を示すことにする¹³⁾。

10) *Ibid.*, p. 37.

11) *Ibid.*, p. 39.

12) G. Doerfer, "Klassifikation und Verbreitung der mongolischen Sprachen", *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: Mongolistik, Leiden/Köln, 1964, S. 40.

13) 拙稿「蒙古語諸方言における語頭**i*音の発展」『一橋研究』第6巻第3号, 1981, 1-16頁。

絶対語頭の母音 *i (*a の前) の発展に関しては、ポッペ¹⁴⁾ やラムステッド¹⁵⁾ により、

「*a の前の *i > 語頭で ja」

という「折れ」の図式がたてられ、これが一般に受け容れられている。これはハルハ方言に限らず、オルドス、カルムイク、ブリヤート等の現代蒙古語諸方言における音声変化の図式として認められているものである¹⁶⁾。例として必ず引用される蒙古文語形 *imaγan* «goat» に対応する諸方言形の第1音節の母音のあらわれは、確かに、上の図式にそのままあてはまる。例¹⁷⁾：

mo. *imaγan* = urd. *jamā*, kalm. *jamān*, bur. *jamāγ*, kh. *jamā*.

しかし、それぞれの方言について母音のあらわれを調査し、事例を増やすにしたがって、上の例が決して語頭位置における母音 *i (*a の前) の発展を適切に代表するものでないことが判明する。ポッペやラムステッドの説明とはうらはらに、オルドス、カルムイク、ブリヤートの諸方言では、この場合、蒙古文語の *i* に対応して語頭で母音 *i* が規則的に保存されているのである。ただ、mo. *imaγan* «goat» (とその派生語) の対応に関して、これらの方言で第1音節に *ja* があらわれている。つまり、従来の図式は、「例外」を主の位置に据えて「規則性」を例外とした、主客転倒した見方である。

なお、ブリヤート方言では mo. *irγai* «Cornelian cherry» に対応して *jargai*

14) Poppe, *Introduction*, pp. 39-40.

15) G. J. Ramstedt, *Einführung in die Altaische Sprachwissenschaft I Lautlehre*. Bearbeitet und herausgegeben von P. Aalto, *Mémoires de la Société Finno-ougrienne* 104: 1, Helsinki, 1957, S. 160.

16) ポッシュは、ブリヤート方言とカルムイク方言において、それぞれ個別に上の図式をたてている。

U. Posch, "Zur Orthographie und Transkription des Burjatischen," *Central Asiatic Journal* 1, 1955, p. 94.

—— "Das kalmückische und verwandte Dialekte," *Handbuch der Orientalistik*, I Abt, V Band, II Abschnitt: Mongolistik, Leiden / Köln, 1964, S. 202.

17) Poppe, *Introduction*, p. 40.

mo. = 蒙古文語, urd. = オルドス方言, kalm. = カルムイク方言, bur. = ブリヤート方言, kh. = ハルハ方言。

～ *irgai* «кизил» の両形がみられるが、これは借用によるものであろうか。さらにカルムイク方言では、若干の単語で第1音節に *ja* があらわれ、あるいは *ja~i* の交替がみられるが、これは子音 *r* の前に集中していることが確認できる。

第1音節に規則的に *ja* をもつのは、唯一ハルハ方言だけである。

表 1. 現代蒙古語諸方言における語頭 **i* 音 (**a* の前) の対応¹⁸⁾

	mo.	urd.	bur.	kalm.	kh.
① <i>imaγan</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>
② <i>irγai</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja~i</i>	<i>ja</i>	<i>ja</i>
③ <i>r</i> の前	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja(~i)</i>	<i>ja</i>
④ その他	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>i</i>	<i>ja</i>

例:

① 既出

② mo. *irγai* «Cornelian cherry», urd. *irg<ä* «espèce de chèvrefeuille», bur. *jargai* ~ *irgai* «кизил», kalm. *jarγä* «anemone (?)», kh. *jargai* «кизил»

③ mo. *ira*-«to cut open» urd. *ira*-, bur. *ira*-, kalm. *jar*-~*ir*-, kh. *jar*-.

mo. *irjayi*-«to grin» urd. *irDžä*-, bur. *irzai*-, kalm. *jarzä*- ~ *irzä*-, kh. *jardzai*-.

④ mo. *idqa*-«to persuade» urd. *iDxa*-, bur. *idxa*-, kalm. —, kh. *jatga*-.
mo. *ilγa*-«to distinguish» urd. *ilg<a*-, bur. *ilga*-, kalm. *ilγ^v*- ~ *jilγ^v*-
kh. *jalga*-.

18) 引用形の出典は次の通り:

mo.: F. D. Lessing et al. *Mongolian-English Dictionary*, 2nd. ed., Bloomington, Indiana, 1960.

urd.: A. Mostaert, *Dictionnaire Ordos*, New York / London, 1968 (rpt.).

bur.: К. М. Черемисов «Бурятско-русский словарь» Москва, 1973.

kalm.: G. J. Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.).

kh.: А. Лувсандэндэв «Монгольско-русский словарь» Москва, 1957.

- mo. *imaṛta* «always» urd. *imaG't'a*, bur. *imagta*, kalm.—, kh. *jamagt*.
 mo. *inaṛ* «beloved» urd. *inak*, bur. *inag*, kalm. *inṛG*, kh. *janag*.
 mo. *inčara* «to neigh» urd. *ints'ag<ā-*, bur. *insagā-*, kalm. *ints'ṛā-*,
 kh. *jantsgā-*.
 mo. *inṣāran* «the young of the antelope» urd. *inDžag<a*, bur. *inzagaṅ*,
 kalm,—, kh. *jandzga*.
 mo. *ilṣara* «to rot» urd. *ilDžire- ~ elDžire-*, bur. *ilzar-*, kalm. *ildžṛ-*,
 kh. *jaldzar-*.

絶対語頭における母音 *i (*a の前) の「折れ」に関する限り、今や、ポッペのいう「多数の例外」の出処は明らかである。ハルハ方言に特徴的な音声変化である「*iの折れ」が、蒙古語史全体の図式として無批判に適用されたために、他方言における母音 i の保存がすべて「例外」ないしは「不規則な変化」とみなされることになったのである。つまり、この場合の例外は、「折れ」の適用範囲を広くとり過ぎたために生じたものである。

ここで検討したのは絶対語頭という限られた条件のもとにおける典型的な事例であるが、このように「折れ」の図式の適用範囲を誤ったために、別の規則性を隠蔽して生じるに至った見かけ上の例外は、ポッペのいう「多数の例外」のかなりの部分を構成しているものと思われる。

「*iの折れ」については、これまでも、「それぞれの方言によって折れの生じた時代と範囲が異なる」というような指摘はなされている¹⁹⁾。しかし、具体的にどの方言でどの範囲に折れが生じているのか、明らかな点はきわめて少ない。したがって、現在の段階で最も必要とされているのは、それぞれの方言における「*iの折れ」の実際を、できるだけ網羅的に再調査することである。

筆者は、もとより、「*iの折れ」の例外がすべて「折れ」の図式の誤まった適

19) 服部四郎『蒙古とその言語』東京・大阪、1943、277頁。

N. Poppe, "On the so-called breaking of *i in Mongolian" *Ural-Altäische Jahrbücher*, Bd. 28: 1-2, 1956, S. 47-48.

S. Kałużyński, "Zur Frage der i-Brechung im Mongolischen" *Ural-Altäische Jahrbücher*, Bd. 36: 34, 1965, S. 340.

用によると主張するものではない。これは問題の一側面にすぎない。図式の適用範囲の妥当性の問題とは別に、「折れ」のとらえ方そのもののうちにも再検討すべき問題が残されていることを次に検討したい。

3. すでにみたように、ラムステッドの「折れ」の図式では、 $i > i\grave{a}, i^e, i^u, i\ddot{u}$ 等、わたりの母音が顕著にみられるが、これは“Brechung”というタームに偏って、過度にわたり母音を強調した面をもっていた。ポッペでは、 $i\grave{a}, i^e, i^u, i\ddot{u}$ のうち、次のように $i\grave{a}$ だけがハルハ方言の「折れ」図式として採用されている。

「* a の前の * $i > i\grave{a}, a^{20)}$ 」(ハルハ方言)

確かに、ハルハ方言には、蒙古文語の第1音節の i (a の前) に対応して、母音 $i\grave{a}$ をもつ単語²¹⁾ と、 a をもつ単語の2種類が観察される。例：

mo. *mingyan* «thousand» = kh. *mjaγga*.
 mo. *bira* «physical strength» = kh. *bjar*.
 mo. *nilqa* «infant» = kh. *njalx*.
 mo. *kirγa-* «to clip» = kh. *xjarga-*.

mo. *miqan* «meat» = kh. *max*.
 mo. *niγa-* «to paste» = kh. *nā-*.
 mo. *jiγasun* «fish» = kh. *dzagas*.
 mo. *čiraj* «face» = kh. *tsarai*.

さて、ハルハ方言におけるこのような第1音節の母音の違いは、一体何を意味しているのか？ これまで、これについて特に注意が向けられることはなかったが、筆者はこれに注目して、両種の母音の違いが、タイプの異なる2種類の発展を反映している、という見解をとるに至った²²⁾。すなわち、第1音節になんらか

20) Poppe, *Introduction*, p. 39.

21) 現代正書法では $\text{я} (=ja)$ であらわされる。

22) 拙稿「『* i の折れ』考——蒙古語における * i 音の発展の規則性と不規則性——」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 12, 1981, 32-49頁。

の程度に *i 音の痕跡の認められる「不完全な折れ」と、*i 音の痕跡が全く認められない「完全な折れ」の二つである。このように2種類の折れを認めるのは、ただ単に蒙古文語の「aの前のi」に対してハルハ方言で *i̇* と a の2種類の母音が対応しているというだけでなく、そのほか蒙古文語の「uの前のi」に対してもハルハ方言で① *i̇* と② u が、また「eの前のi」に対しても③ i と④ e が、それぞれ対応しているという事実に基づいているのである。例：

- ① mo. *kidu-* «to massacre» = kh. *xjad-*
 mo. *kirγui* «small hawk» = kh. *xjargui*.
 mo. *niluγun* «oily» = kh. *njalūγ*.
- ② mo. *kituγa* «knife» = kh. *xutga*.
 mo. *kimusun* «nail» = kh. *xums*.
 mo. *niruγun* «spine» = kh. *nurū*.
- ③ mo. *nimgen* «thin» = kh. *nimgen*.
 mo. *ǰigde* «even(ly)» = kh. *dǰigd̄*.
 mo. *čime-* «to adorn» = kh. *tšim-*.
- ④ mo. *nigen* «one» = kh. *neg*.
 mo. *ǰibe* «rust» = kh. *dzev*.
 mo. *čike* «straight» = kh. *tsex*.

ハルハ方言における「完全な折れ」と「不完全な折れ」に関連して、ウラディミルツォフが次のような「*iの折れ」の段階説をとっていることが注目される²³⁾。すなわち、ハルハ方言では、①蒙古文語の口蓋化子音 *ǰ*, *č* に対して、それぞれ非口蓋化子音の *dz*, *ts* が対応しているが、②母音 *i* に先行する *ǰ*, *č* に対しては、口蓋化子音 *dǰ*, *tš* が対応している。つまり、ハルハ方言では、ある時期に口蓋化子音 *dǰ*, *tš* が非口蓋化する音声変化が起ったものの、母音 *i* の前ではこの変化が妨げられたものと考えられる。例：

- ① mo. *ǰ* = kh. *dz*; mo. *č* = kh. *ts*.

23) Владимирцов, Указ. соч., стр. 399-400, 405-406.

- mo. *jarliγ* «decree» = kh. *dzarlig*.
 mo. *jalayru* «young» = kh. *dzalū*.
 mo. *jun* «summer» = kh. *dzun*.
 mo. *čad-* «to be(come) saturated» = kh. *tsad-*.
 mo. *čay* «time» = kh. *tsag*.
 mo. *čoki-* «to hit» = kh. *tsoxi-*.
 ② mo. *ǰ* (*i*) = kh. *dž*; mo. *č* (*i*) = kh. *tš*.
 mo. *ǰida* «spear» = kh. *džad*.
 mo. *ǰirya-* «to be joyful» = kh. *džarga-*.
 mo. *ǰirya* «ambling» = kh. *džorō*.
 mo. *činar* «quality» = kh. *tšanar*.
 mo. *čida-* «to be able» = kh. *tšad-*.
 mo. *čingya* «tight» = kh. *tšagga*.

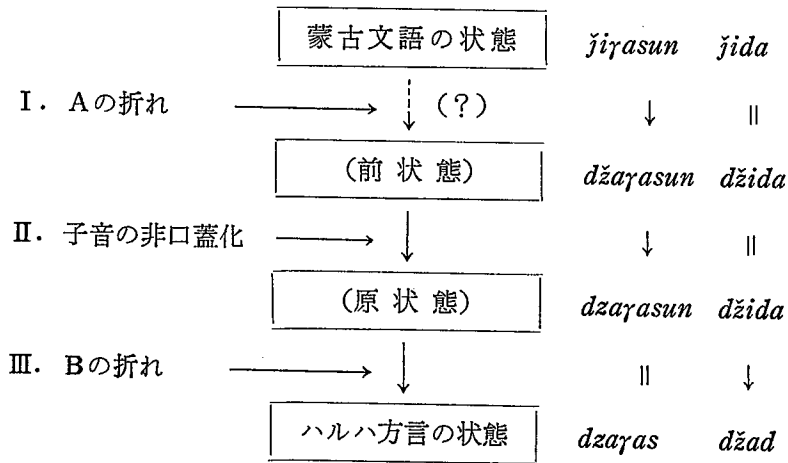
しかるに、上の音声変化には、次のような「例外」がある。それは、蒙古文語で *ǰi*, *či* の連結をもつ若干の単語に対して、ハルハ方言で（上の規則から期待される *dž*, *tš* にかわって）*dz*, *ts* が対応していることである。例：

- ②' mo. *ǰ* (*i*) = kh. *dz*; mo. *č* (*i*) = kh. *ts*.
 mo. *ǰirasun* «fish» = kh. *dzagas*.
 mo. *ǰiya-* «to teach» = kh. *dzā-*.
 mo. *ǰirγuran* «six» = kh. *dzurgā*.
 mo. *čirai* «face» = kh. *tsarai*.
 mo. *čisun* «blood» = kh. *tsus*.
 mo. *čiqul* «narrow» = kh. *tsuxal*.

このような子音変化の例外に対して、ウラディーミルツォフは、これら②'の単語では、*dž* > *dz*, *tš* > *ts* という子音変化の前に、すでに *i* が「折れ」て別の母音としてあらわれていたためである、と説明した²⁴⁾。仮に、②'の語が蒙

24) Там же. ただし、これに対して、何故②'の語にだけより早く「折れ」が生じたのかという疑問が發せられて然るべきであろうが、これについてウラディーミルツォフの説明はない。

た母音の変化をAの折れとし、②の語の変化をBの折れとすれば、ハルハ方言の発展は I. Aの折れ, II. 子音 $d\check{z} > dz$, $t\check{s} > ts$ の変化 (ただし母音 *i* の前では $d\check{z}$, $t\check{s}$ のまま), III. Bの折れ, という順序で音声変化を経たことになる。



ここでの問題点は、Aの折れを、規則的な音声変化として捉えられるかどうか、という点であるが、それを暫く置くとすれば、上の説明はきわめて説得力に豊むものと思われる。

ここで、先に見た、ハルハ方言の「完全な折れ」と「不完全な折れ」を思い出そう。Aの折れ (例: *dzagas*, *tsarai*) とBの折れ (例: *džad*, *tšanar*) を比較した場合、前者は語頭子音が非口蓋化子音であり、そこに母音 **i* の痕跡は認められないのに対して、後者は語頭子音が口蓋化子音であり、そこに母音 **i* の痕跡が認められる。したがってAの折れは「完全な折れ」に、Bの折れは「不完全な折れ」にそれぞれ属するものとする事ができる。

このことから、「完全な折れ」と「不完全な折れ」というハルハ方言におけるタイプの異なる2種類の折れが、やはり時代的に異なった別種の音声変化の結果を反映していると考え無理はないであろう。「完全な折れ」はAの折れと同種の、時代的により古い音声変化を反映するものであり、「不完全な折れ」はBの折れと同種の、より新しい時代の音声変化を反映していると思われる。

ここで、強調しておかなければならないことは、従来「*iの折れ」として扱

われてきたハルハ方言の現象のうちには、一元的な「折れ」の図式では覆いきれない、混質的な要素が含まれている、ということである。この事実を無視して、「**i*の折れ」を単一の現象として捉えている限り、そこから、和解不能な一連の「例外」を解消することは望めないであろう。ラムステッド以来ポッペに受け継がれている伝統的なハルハ方言の「**i*の折れ」の図式における最大の問題点はこの点にあると思われる。

4. ハルハ方言における「完全な折れ」と「不完全な折れ」が時代的に異なる二つの音声変化を反映しているという推論に関連して、ここにひとつの興味深い事実を指摘することができる。それは、ハルハ方言の折れとオルドス方言の折れとの間にみられる相関的な関係である。

オルドス方言は、第1音節に最もよく母音 *i* を保存している方言のひとつに数えられる。他方、ハルハ方言は、既に見たように、「折れ」をもって特徴づけられる方言である。このように対照的な両方言の差異は、しかしながら、見かけ上の現象にすぎず、実際はこの二つの方言の「折れ」に、きわめて平行的な発展を認めることができる。

蒙古文語の「*a*の前の*i*」に対応して、オルドス方言では若干の単語で母音 *a*（「折れ」）が観察され、他の多くの語では母音 *i* が保存されている。この場合、どのような語に「折れ」が生じており、どのような語で母音 *i* が保存されているかは必ずしも明らかでなく、個々の事例が示されていたに過ぎない²⁵⁾。しかし、オルドス方言の事例を集めてハルハ方言の折れと比較すると、注目すべきことに、オルドス方言で「折れ」が生じている語とハルハ方言で「完全な折れ」を蒙っている語とは一致しているのである。同様に、オルドス方言で第1音節に母音 *i* を有している語は、ハルハ方言で「不完全な折れ」を蒙っている語と合致する。この相関関係は一定していて、互いに混ざり合うことがない²⁶⁾。

25) A. Mostaert, "Le dialect des Mongols Urdus (Sud)", *Anthropos* XXI, 1926, p. 863.

26) 拙稿「『**i*の折れ』再説——ハルハ方言とオルドス方言の発展の平行性——」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 13, 1982, 37-55頁。

ただし、次の場合には上のような相関関係は確認できない。つまり、蒙古文語の *si-* (語頭子音が *s* の場合) に対応して、オルドス方言では第1音節に母音 *a* をもつ単語 (*ša-*) と、母音 *i* をもつ単語に分かれるが²⁷⁾、ハルハ方言では一様に *ša-* が対応しているのである。また、既に述べたように、蒙古文語の絶対語頭の *i* (*a* の前) に対応して、オルドス方言では *jamā* «chèvre» (とその派生語) のみ *ja* が、他は母音 *i* があらわれているが²⁸⁾、ハルハ方言では一様に *ja* があらわれている。例：

① urd. 「折れ」 = kh. 「完全な折れ」

mo.	urd.	kh.
<i>miqan</i> «meat»	<i>maxa</i>	<i>max</i>
<i>niya-</i> «to paste»	<i>nā-</i>	<i>nā-</i>
<i>jiya-</i> «to teach»	<i>Džā-</i>	<i>dzā-</i>
<i>jiyar</i> «musk»	<i>Džār</i>	<i>dzār</i>
<i>jiyasun</i> «fish»	<i>Džag<asu</i>	<i>dzagas</i>
<i>čiraj</i> «face»	<i>tš'arā</i>	<i>tsarai</i>

② urd. *i* = kh. 「不完全な折れ」

mo.	urd.	kh.
<i>bira</i> «physical strength»	<i>Bira</i>	<i>bjar</i>
<i>mingyan</i> «thousand»	<i>miŋg<a</i>	<i>mjaŋga</i>
<i>nilqa</i> «infant»	<i>nilxa</i>	<i>njalx</i>
<i>kirya-</i> «to clip»	<i>k'irg<a-</i>	<i>xjarga-</i>
<i>jida</i> «spear»	<i>DžiDa</i>	<i>džad</i>
<i>jiran</i> «sixty»	<i>Džira</i>	<i>džar</i>
<i>jiŋya-</i> «to be joyful»	<i>Džiŋg<a-</i>	<i>džarga-</i>

27) 蒙古文語の *si-* に対応してオルドス方言に *ša-* があらわれているのは、mo. *siCa-* の連結で *C=b, ɣ, q, r, rɣ, rɥ* の場合である。それ以外の場合 (*C=bq, d, j, lɣ, lʃ, lt, m, n, nd, ngl, nt, rb, t*) ではオルドス方言に *ši-* があらわれている。

28) この場合、オルドス方言の *jamā* が、より古い時代の「折れ」を反映している可能性がある。もうひとつの可能性は「方言的借用」であるが、現状ではいずれとも決定し難い。

<i>čida-</i> «to be able»	<i>tš'iDa-</i>	<i>tšad-</i>
<i>činar</i> «quality»	<i>tš'inar</i>	<i>tšanar</i>

これに関連して、オルドス方言のもう一つの保守的な特徴は、ハルハ方言でみた、口蓋化子音が非口蓋音化する音声変化 ($d\check{z} > dz$, $t\check{s} > ts$) を蒙っていないことである。つまり、蒙古文語の子音 \check{z} と \check{s} に対して、オルドス方言では常に $D\check{z}$, $t\check{s}'$ という口蓋化子音が対応している。

このようなオルドス方言の特徴を、ハルハ方言との関係でまとめると、次のようになる。オルドス方言では：

1. ハルハ方言の「完全な折れ」に対応して「折れ」が生じている。
2. ハルハ方言の非口蓋音化 ($d\check{z} > dz$, $t\check{s} > ts$) に対応する変化は生じていない。
3. ハルハ方言の「不完全な折れ」に対応する「折れ」は生じていない。

これは、さきにハルハ方言の史的発展を説明するための一段階として、われわれが仮定した「原状態」に合致する。つまり、この位置におけるオルドス方言の状態は、ハルハ方言のより古い発展段階をそのまま反映している、とみなしうるのである。この事実をもって、ハルハ方言における「時代を異にする2種類の折れ」という推論は有力な傍証を得たことになる。

5. ハルハ方言とオルドス方言の比較を通して明らかになったことは、「完全な折れ」と「不完全な折れ」が全く性質を異にする音声変化だ、ということである。「不完全な折れ」は、より新しい時代に、ハルハ方言に独自に生じた音声変化である。これに対して「完全な折れ」は、ふたつの方言間に共通の現象であることがわかった。これらの方言で全く同じ変化が別個に生じたとは考えにくいから、当然、この現象は両方言に共通の時代にまでさかのぼると考えられる。

さらに、カラムイク方言も「完全な折れ」に対応してこれらの方言と共通の折れを蒙っていると考えられる。

カラムイク方言では、ハルハ・オルドス方言の「完全な折れ」に対応する語は、1語を除いて²⁹⁾、次のようにすべて折れを蒙っている。

29) mo. *čiraj* «face» = kalm. *tširē*

mo.	kalm.
<i>miqan</i> «meat»	<i>max^vn</i>
<i>niya-</i> «to paste»	<i>nā-</i>
<i>jiya-</i> «to teach»	<i>zā-</i>
<i>jiyar</i> «musk»	<i>zār</i>
<i>jiyasun</i> «fish»	<i>zay^vsŋ</i>

カルムイク方言では、蒙古文語の *si* (*a* の前) に対して、ハルハ方言におけると同様、一様に *ša* が対応している。それ以外には、この方言における「折れ」はきわめて限られており、次のような語を除けば、残りの圧倒的多数の語で母音 *i* が保存されている。

mo.	kalm.
<i>bira</i> «physical strength»	<i>bar^v</i>
<i>čimala-</i> «to want more»	<i>tšaml₆-</i>
<i>čina-</i> «to boil»	<i>tšan-</i>
<i>čingra</i> «strong»	<i>tšagg_{<v}</i>
<i>čida-</i> «to be able»	<i>tšad^v-</i>

ところで、カルムイク方言ではハルハ方言と同様に、口蓋化子音の非口蓋化の変化が生じた。つまり、ある時期に① *dž* > *z*, *tš* > *ts* の変化が起ったが、②母音 *i* の前ではこれが妨げられた。

① mo. *ǰ* = kalm. *z*; mo. *č* = kalm. *ts*

mo.	kalm.
<i>ǰarlij</i> «decree»	<i>zarl'iq_{<}</i>
<i>ǰalaju</i> «young»	<i>zalū</i>
<i>čad-</i> «to be saturated»	<i>tsad^v- ~ tsat-</i>
<i>čay</i> «time»	<i>tsaG_{<}</i>

② mo. *ǰ(i)* = kalm. *dž*; mo. *č(i)* = *tš*

mo.	kalm.
<i>ǰida</i> «spear»	<i>džid^v</i>

<i>ǰirɣa-</i> «to be joyful»	<i>dǰirɣv-</i>
<i>činar</i> «quality»	<i>tšinɣ</i>
<i>čingda</i> «strict(ly)»	<i>tšind^o, tšigd^o</i>

したがって、上の子音変化①が生じた時点で、「完全な折れ」に対応する *zā-*, *zār*, *zay^osq* の語では、すでに第1音節に *i* 以外の母音があったと考えねばならない。しかし、同じように「折れ」を蒙っている *tšamɫ-*, *tšan-*, *tšagg<v*, *tšad^o-* の語では、口蓋化子音が保存されていることから、上の子音変化の時点で未だ母音 *i* が保存されていたはずである。

このように、カルムイク方言においても、子音変化をはさんで、より古い折れと、より新しい折れを区別することができる。しかもより古い折れは、ハルハ・オルドス方言の「完全な折れ」とほとんど重なり合っている。カルムイク方言に独自の折れは、きわめて少数の語に限られるが、これが特殊な音声的条件のもとで生じたのか、借用や他の原因によるものか、現在のところ決し難い。

ハルハ、オルドス、カルムイクの3方言に共通の「完全な折れ」は、これらの方言に共通の歴史の時代に由来すると考えられる。この意味で、「完全な折れ」を蒙古語史の中に適切に位置づけることは重要な意義をもつものとする。

おわりに

われわれは、ドルファーのいう「特異で、説明困難な言語発展」の問題に分け入った。確かに、「**i* の折れ」の現象は複雑で、一見捉え難い様相を呈しているが、それは決して接近不可能な問題ではない。問題の解決の道を閉ざしているのは、現象の複雑さというより、むしろその現象を特異なものときめつけるような見方であることは強調しておかねばならない。

本稿では、蒙古語史において与えられている「**i* の折れ」の位置づけが、いかにハルハ方言の伝統的な「折れ」の図式にバイアスされているかをみた。そこでは、それぞれの方言における「折れ」の実際が調査されたあとに対応の図式がたてられたのではなく、あらかじめ設けられた分類原理に合致するものは「規則的」、合致しないものは「例外」と選別が行なわれていたに過ぎない。

ここで検討したのは、一部の方言の、しかも限られた条件のもとにおける「折れ」である（それは特に問題の多い箇所ではある）。この問題の解明には、何よりもまず、それぞれの方言毎に、「*iの折れ」の実際をできるだけ網羅的に調査し、明らかにすることが必要である。

その際、「*iの折れ」を単一の現象として捉えている限り、前車の轍を踏むことは避けられない。「*iの折れ」の複雑な現象は、複数の異質の要素が錯綜していることが大きな原因となっていることは明らかである。このもつれを解きほぐすためのひとつのてだてとして、いくつかの方言間に共通の「折れ」とそれぞれの方言に独自の「折れ」を見究めることが重要と思われる。

「*iの折れ」を現代蒙古語全体の主要な特徴のひとつに数えるような単純な見解は早々に廃棄されるべきであろう。蒙古語史にとって重要なのは個別の方言の枠を越えた、方言間に共通の一部の「折れ」であり、より古い時代にさかのぼる現象である。より新しい時代のそれぞれの方言に独自の「折れ」は、むしろ諸方言の分類における重要な指標として捉え直すことができると考える。

引 用 文 献

- 栗林 均 「『*iの折れ』考—蒙古語における *i 音の発展の規則性と不規則性—」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 12, 1981, 32-49頁。
- 「蒙古語諸方言における語頭 *i 音の発展」『一橋研究』第6巻第3号, 1981, 1-16頁。
- 「『*iの折れ』再説—ハルハ方言とオルドス方言の発展の平行性—」日本モンゴル学会『モンゴル研究』No. 13, 1982, 37-55頁。
- 服部四郎『蒙古とその言語』東京・大阪, 1943.
- Doerfer, G. "Klassifikation und Verbreitung der mongolischen Sprachen" *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: Mongolistik, Leiden / Köln, 1964, S. 35-50.
- Kałużyński, S. "Zur Frage der i-Brechung im Mongolischen," *Ural-Altaische Jahrbücher*, Bd. 36: 3-4, 1965, S. 340-347.

- Lessing, F. D. et al., *Mongolian-English Dictionary*, corrected rpt., Bloomington, Indiana, 1973.
- Mostaert, A. "Le dialect des Mongols Urdus (Sud)" *Anthropos* XXI, 1926, pp. 851-869; *Anthropos* XXII, 1927, pp. 160-186.
- , *Dictionnaire Ordos*, New York / London, 1968 (rpt.).
- Poppe, N. *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954.
- , *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Mémoires de la Société Finno-ougrienne 110, Helsinki, 1955.
- , "On the so-called breaking of *i in Mongolian," *Ural-Altäische Jahrbücher*, Bd. 28: 1-2, 1956, pp. 43-48.
- Posch, U. "Zur Orthographie und Transkription des Burjatischen," *Central Asiatic Journal* 1, 1955, pp. 81-100.
- , "Das kalmückische und verwandte Dialekte," *Handbuch der Orientalistik*, I Abt, V Band, II Abschnitt: Mongolistik, Leiden / Köln, 1964, S. 200-226.
- Ramstedt, G. J. "Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen," *Journal de la Société Finno-ougrienne* XXI: 2, 1903.
- , *Einführung in die Altäische Sprachwissenschaft* I Lautlehre. Bearbeitet und herausgegeben von P. Aalto, Mémoires de la Société Finno-ougrienne 104: 1, Helsinki, 1957.
- , *Kalmückisches Wörterbuch*, Helsinki, 1976 (rpt.).
- Sievers, E. *Grundzüge der Phonetik zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen*, 5. Aufl., Leipzig, 1901.
- Владимирцов, Б. Я. «Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика» Ленинград. 1929.
- Лувсандэндэв, А. «Монгольско-русский словарь» Москва, 1957.
- Черемисов, К. М. «Бурятско-русский словарь» Москва, 1973.

Some Problems in the “Breaking of *i” in Mongolian

Hitoshi KURIBAYASHI

The breaking of **i* is the regressive assimilation of the vowel **i* of the first syllable by the vowel of the following syllable. This phenomenon is regarded in the history of Mongolian languages as one of the main characteristics of Modern Mongolian.

In this article, the author points out some problems in the current schema of the *i*-breaking of Khalkha Mongolian and in its application to Mongolian comparative studies.

Firstly, as we have confirmed in the word-initial position the regular retention of the vowel **i* before **a* as *i* in the Urdu, Buriat, and Kalmuck languages, the schema was applied too widely and this resulted in producing numerous exceptions.

Secondly, the current schema of *i*-breaking of Khalkha Mongolian failed to distinguish and confused the two types of *i*-breaking, i. e. one in which the traces of the vowel **i* can be observed and the other without any traces of it.

The author maintains that the two types of *i*-breaking reflect the results of two different kinds of phonetic changes, on the grounds that we can observe the earlier stage of the development of the vowel **i* before **a* in Urdu, where only one type of breaking occurred.